

流山稲門会

【交譲葉】俳句の会報告

令和七年十二月句会（第一六三回）
兼題

【寒鴉】

開催日 令和七年十二月二十七日

開催場所 流山市生涯学習センター

出席者 七名

投句者・選句者 七名

【五点句】

●木枯に蕾の時は止まりけり 柳 花

時はすべての命あるものの上を等しく流れていく。蕾はやがて花開くべく命の営みを続けているが、木枯しが吹いて一瞬成長を止めてしまったというのである。花開かず、蕾のままに枯れてしまうのか、その後小春日和が続いてめでたく花を咲かせるのか、気になるところである。蕾の時という表現がユニークである。今年は秋晴れが続いて気温の高低の差が大きかったように思う。

選評 夢心

【四点句】

●ふんわりと日向の屋根に寒鴉 柳 花

ふんわりと日向の屋根に寒鴉、通常は真っ黒い身体、とがった唇、鋭い目つきと接することの多い鴉が今はおそらく、つがいで屋根の上でゆったりと過ごしています。

たっぷりと日を浴び、にこにこと落ち着いている。その情景が浮かんできます。

選評 艸寛

【四点句】

●舞う枯葉へッドライトに金の波 柳 花

秋から冬にかけて、木々は葉を落とし又、新しい息吹を迎える為に身に纏ってきたエネルギーの基の葉を一旦整理する。

その木にとって大切であったものを作者は運転しながら我にかかると枯葉を「金の波」と表した。実にお洒落な、素敵な表現を用いたのである。きっと作者は、日々美しい心での物の見方を出来る方なのであろう。吾も心したいものである

選評 互酬

【三点句】

駅前のこだわり酒場鍋囲む
跪き見上げ見下ろす床紅葉

互酬 夢心

【二点句】

寒鴉人間世界睥睨す
仏壇をほかす断捨離年の暮
襦袍着て机に向かう夜は更けて

小牧 玄鳥 艸寛

【一点句】

寒鴉鳴く柝の音響きおり
寒鴉鋭い目つきで吾見つめ
電線の寒鴉茜に染まりけり
冬天へ拳振上げ校歌かな
豪雪に知るや人生曲がり角
寒鴉鳴き吾も寂しき夕間暮れ
冬木立イルミネーション自撮りして
再稼働容認の記事冬ざるる
熊穴に入る気配なく季語遷り
ビル街に灯ともし夕べ枯木映え
寒鴉食べ物需め庭に二羽

互酬 艸寛 徹心 玄鳥 小牧 小牧 玄鳥 徹心

【投句】

寒鴉ラッシュの朝を眺めをり
生ごみを食べ散らかすや寒鴉
寒鴉のど飴一つあげましようか
お歳暮の送り手減りし老夫婦
公園の散歩落葉を踏み分けて
席替えにストイック真横争いて
寒鴉の眼底なしのよう目を逸らす
能くヤッタ今年一年ガンバッタ
小春の日万歩歩いて筋肉痛

玄鳥 夢心 柳花 小牧 夢心 艸寛 徹心 互酬 夢心

『句会後記』

令和七年も余すところ今日の句会を含めて五日で新しい年午年を迎えます。今年を振り返ってみると会員の投句率については、ほぼ大半が出句して来たように思います。

これは、日々の生活において作句することだと思えます。と、言うことはそれを超え魅力が「ゆずり」のこの会にはあるということです。

良い集まりにはお互いに尊敬し引き合う何かがあると思います。来年もお互いに引力を持ちながら投句・選句・句会を続けたいものです。

互酬（菅原）